

〔研究論文〕

主体的な学びを促すための中学校英語科における指導方法について

—選択学習に着目して—

Teaching methods of English class in junior high school to proceed the positive learning
-Focus on the learning selection-

井 手 口 菜 緒

Nao IDEGUCHI

福岡教育大学教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

(2020 年 1 月 31 日受理)

本研究は、21 世紀型スキルの 1 つである「コミュニケーション」(内省的コミュニケーション)を育成するために、選択学習に着目し、授業実践を行ったものである。選択学習の有効性については、川上(1995)などによって指摘されているが、選択学習を実際にどのように行うのかについてはまだ未解明の部分がある。本研究では、選択学習を行うにあたりいくつかの点に留意した。一斉学習に慣れている生徒が選択学習へスムーズに移行できるように準備学習を設定するとともに、教材の工夫を行った。結果として、準備学習の成果とともに、選択学習で生徒が積極的に教材に取り組んでいる様子を捉えた。今後は、生徒が自身の学習状況を的確に把握できるような「マップ」を作成し、生徒が自身を客観的に捉えることができるような工夫が必要である。

キーワード：コミュニケーション，選択学習，中学校英語科

1 はじめに

本研究の目的は、英語学習における自己選択のための方法を探ることである。これまで中学校の英語科学習は、一斉学習を中心として学力に関係なく同じ教材を配布し、同じ学習活動をさせる傾向が強い。なぜなら、英語は中学校において本格的に導入される教科であり、学習経験にほとんど差異がないことを踏まえて、学習内容の理解とスキルの充実が中心とされてきたからである。しかし、このことは生徒個々の学習進捗に即応することができにくく、その結果、学力が定着しないままに次の段階にいつてしまい、次の内容が理解できないという状況を生んでしまっている。

また、学習内容について生徒は他者から与えられた学習課題をこなしているだけであり、生徒自身が自分の学習状況を踏まえて、自分が主体的に

その学習に取り組むということにつながりにくいということも考えられる。

こうした状況を踏まえ、今回選択学習の取り入れを検討した。選択学習の有効性については川上(1995)などにより指摘されている。しかし、選択学習をどのように実際行うのかについてはまだ未解明の部分がある。(注1)

そこで、本研究においては、英語科学習における選択学習において、生徒自身が教材を選択するという学習展開を構想し、主体的に学ぶための方法を追究することとした。

2 先行研究

今後の学校教育で育成すべき資質・能力として「21 世紀型スキル」が示された。B・トリリングやC・ファデルは、21 世紀型スキルを「創造性」・「批判的思考」・「コミュニケーション」・「協働」

の4つであると述べている。この4点の中で、英語科学習に関係が深いものとしては、技能の習熟も含めた「コミュニケーション」であろう。この「コミュニケーション」については、英語科授業を研究している鈴木(2018)によると、英語の授業に存在するコミュニケーションには次の5つがあると定義されている。

- ① 4技能育成のためのコミュニケーション
- ② 授業成立と学力形成のためのコミュニケーション
- ③ 発問によるコミュニケーション
- ④ 内省的コミュニケーション
- ⑤ 自己表現活動

上記の①～⑤についての鈴木の記事を要約すると、次のようになる。①は、ペアワークやグループワークがあてはまる。4技能を育成するためには、授業者の発する英語の量(しゃべりすぎないこと)と質(表現や難易度)に注意しなければならない。②は、授業者から学習者への働きかけである。英語に関する専門的知識を背景に、どんな質問にも答えてくれる授業者の寛容さに加え、学習方略の指導と自立支援がその中心である。③は、教材の解釈を深めるための授業者からの発問のことである。④は、自己内対話を行うことである。思考力を育成するに当たっては、自分との対話は不可欠である。内省的コミュニケーションは対人コミュニケーションの前提となる。⑤は、自分の生活や内面を見つめ掘り下げた上で、教室内の学習者同士が英語を通じて交流する活動のことである。内省的コミュニケーションをベースにした教室内的コミュニケーションであり、学習者の思考を促す。異なる価値観を知り共有し合うことにつながり、人間形成や人格形成へとつながることができるコミュニケーションである。

これらのうち、本研究では、④に注目したい。④は自己内対話を行うことである。新たな学力論を述べた松下(2011)は、学びにおいて、「対象世界との対話」、「他者との対話」、「自己との対話」の3点が必要であることを指摘している。このうちの「自己との対話」とは、自己を客観的に捉えることであり、今後の自己のありようを模索することでもある。これは、今必要とされている主体的・対話的な学習ともつながる。「自己との対話」には、内容的、価値的な事柄についての対話も重要であるが、自己の現在、学習状況を見出すという視点からも取り組む必要がある。特に英語科という集

積が必要な学習では、自己の学習状況や自己が得意な分野などを見出していくという点からの「自己との対話」が成立することは大切ではないだろうか。そこで本研究では、自己の学習状況や自己が得意な分野などを見出し、今後の自己の学習を自己が選択するための「自己との対話」を学習に取り入れる選択学習に着目したい。

選択学習を取り入れ、その成果を取り入れた川上(1995)は、選択学習について次のように述べている。「生徒の学習意欲を刺激し、主体的・積極的に授業に参加する意識を目覚めさせ、生徒の自立心を養成し、その結果として生徒の自己確立につながるという点で有効な方法」。また、現在、教育コンサルタントやワークショップのファシリテーターとして活躍しているM・エンダーソン(2019)は、「効果的な選択肢が学びをより深める」と明言している。

以上のことから選択学習を行うことの良さは次の2点にまとめられる。1点は、選択学習を行うことは、生徒の主体的な学習を促すことができ、学びを深めることができること、2点目は、生徒が自分自身を知ることにつながり、自分に合った学習方法の見出しにつながられることである。これらのことから、今後求められる教育として、生徒は教師から学習課題をただ与えられるだけでなく、自己内対話を通して、生徒が自ら学習課題を選択できるような工夫が必要と考える。選択学習を授業に取り入れることは、21世紀型スキルの中に示されている「コミュニケーション」(「内省的コミュニケーション」)を獲得することにつながり、生徒が自分の学習に対して主体的に取り組むことができるのではないだろうか。

3 研究概要

今回の研究を進めていく上で、留意したことは、一斉学習に慣れている生徒が選択学習にスムーズに移行できるようにということだ。そのために、2年間にわたって2種類の授業実践を行った。まず1年目では、生徒が自分自身で選択を行わずに、教師側が提供した同一の教材を使って、自分たちのペースで学習を行うというものである。これを準備学習と位置付けた。この準備学習の目的は2点ある。1点目は、生徒自身が選択学習の必要性を見いださせるため、2点目は、生徒にとってどのような教材が有効であるかを教師側が確かめるためである。

準備学習で行った授業実践より、定められた時

間がある場合、教師の指示を待たずに生徒自ら主体的に学習へ取り組むことができるということがわかった。

こうした準備学習を経て2年目の授業実践では、生徒自身に教材や学習課題を選択させた方がより意欲的な学習が望めるのではないかと考え、選択学習を取り入れることにした。実際の授業においては、練習問題を生徒が自分の解きたい問題を選択する方法を取り入れた。本来であれば、複数の教材を作成し、選択させるべきであったが、前期と後期で授業実践を行ったクラスが異なったため、練習問題を選択する方法を取った。

ただし、今回の授業実践は、教職大学院の2年間の学校における実習の中で行ったため、対象生徒と対象学年が異なっている。

4 研究の具体（授業実践について）

(1) 授業実践の概要

今回、授業実践をするにあたって、段階を踏んで行った。はじめに準備学習として、グループに分けて、カードゲームという同じ教材を用いた活動を行った。これが〈準備学習〉である。次に、生徒自身に教材の部分選択をさせた。教師が教材の説明をしたのちに、自分がやりたい問題を選択し、その教材に取り組ませた。これが〈授業実践Ⅰ〉である。最後に、生徒に教材を冊子にして配布し、教師の説明後、自分がやりたい問題を選択して行った。これが〈授業実践Ⅱ〉である。〈授業実践Ⅰ〉と〈授業実践Ⅱ〉の違いは、〈授業実践Ⅰ〉は、教師の説明のみが手掛かりであり、教材を選択する時間も限られていた。〈授業実践Ⅱ〉は、冊子で配布したため、教師の説明後どの教材を選択するかを吟味する時間が取れたことである。

〈準備学習〉では、選択学習を取り入れる前に、選択をせずに同じ教材を使って、それぞれのグループごとに学習を行った。以下にその準備学習の概略と成果と課題について述べる。

(2) 3つの授業実践の具体

① 〈準備学習〉について

1) 〈準備学習〉の概要

〈準備学習〉では、全員が同じ内容のカードゲームを行った。ゲームのルールについて説明したのちに活動に取り組みさせた。その後、カードで使われた表現がどのくらい定着してきたかを確認するために筆記テストを行った。準備学習の詳細を以下に述べる。

・実施日：平成30年12月12日（水）

・福岡市内中学校1年生・1クラス

・内容・主眼：現在進行形の疑問文の作り方や使い方・Whatから始まる現在進行形の疑問文とbe動詞から始まる現在進行形の疑問文の違いを理解することができる。

また、今回教材として使用したものを資料として以下資料①・②として掲載する。

資料① 授業で使ったカードの一部



資料② 授業で使ったチェックシート

CHECK!

😊チェックシート😊

☆現在進行形☆

be 動詞+ (動詞の原形) ing

- ① He is watching TV.
- ② She is reading a book.
- ③ They are cleaning their classroom.
- ④ They are eating lunch.
- ⑤ He is listening to music.
- ⑥ He is looking for his key.
- ⑦ He is sleeping.
- ⑧ She is writing the letter.
- ⑨ He is running.
- ⑩ Yes, I am. / No, I'm not. (どちらでも可)
- ⑪ Yes, I am. / No, I'm not. (どちらでも可)
- ⑫ Yes, he is.

※答えを確認する人は先生になったつもりで
優しくチェックしよう

資料①は、実際に授業内で使用したカードの一部である。このカードを作成するにあたって留意したことが2点ある。1点目は、生徒が身近に使うことのできる表現を使用したことである。日常的な場面でも使うことができるようにするためである。2点目は、使用する動詞を右下に記載していることである。生徒によってはどの動詞を使って英文を表現していいのかわからないかもしれない。そのための手掛かりを掲載しておくことで、どの生徒でも自力で英文を作成できるようにした。

資料②は、各班に1枚ずつ配布したチェックシートである。これを作成し、活動で使用した理由は2点ある。1点目は、生徒自身で答え合わせができるようにするためである。2点目は、生徒自身がお互いに教えることができるようにするためである。教師が全部の班を丁寧に教えることは難しい。そのため、チェックシートがあることで不安な点をその場ですぐに確認することができる。

2) 〈準備学習〉における生徒の実態

今回の活動に対し、30人中29人の生徒が楽しく活動に取り組むことができたことと答えた。楽しめなかった生徒の理由は、ゲームのルール理解不足であった。活動時間は10班中8班が予定の10分で終わっていたが、2つの班が活動時間に15分もかかっていた。時間がかかった理由はそれぞれ異なっていた。2つの班ともに、活動内容は異なるが共通しているのは、基礎的な活動だけでなく、応用的な活動を自分たちで考えて行っていた。1つの班は、1回目の活動が終わって、自分たちから主体的に2回目を行っていた。もう1つの班は、カードに書いてある単語を使って英作文を考えるだけでなく、教科書を見ながら他にこのカードを表現するために使える単語はないかを探しながら行っていた。

3) 〈準備学習〉の成果と課題

今回の活動において、授業分析から成果を2点、課題を3点挙げる。

成果の1点目は、作成した教材が生徒の実力とマッチングにより、活動がスムーズに流れたことである。このことから、活動内容の難易や量は適量であれば、生徒の活動に対する取り組み方が、教師が与えた教材や活動指示は同一に関わらず、異なり、自ら必要なことを選んで学習に取り組むということである。2点目は、活動で使った教材にいくつかの工夫を行ったので、生徒同士が協力して文を作成することが出来ていたことである。そのため、答えを見ずに、教え合い学習を通して、

生徒自身で学びが行えていたのではないかと推察する。

課題の1点目は、活動を自分たちで工夫させるための手立てや基本の活動だけでなく+αの活動を示すことができなかったことである。2点目は、分からない生徒に対して、他の生徒がどのように教えているかをすべて把握することが出来なかったことである。班活動を仕組んでいるので、教えている様子は机間指導等を通して、確認することはできたが、生徒が教えている具体内容は把握できなかった。そのため、活動がただ楽しいだけのものにならないように、教え合うときの環境・仕組みを再検討する必要がある。3点目は、話す活動が書く活動につながっていないことである。活動が終わったグループから書く活動に向けて確認をさせたが、文法ミスやスペルミスをしている生徒が約3割いた。今後は、ケアレスミスや思い違い等あらかじめ間違いを想定して手立てを打つ必要がある。

上記で行った〈準備学習〉に基づき、〈授業実践I〉では、複数の教材を用意し、生徒に教材を選択させる授業実践を前期と後期にそれぞれ1回ずつ行った。以下にそれぞれの授業実践の概略と成果と課題について述べる。

② 〈授業実践I〉について

1) 〈授業実践I〉の概略

〈授業実践I〉では、3種類の教材の内容について説明後、生徒が前に来て自分にあった問題を選択する方法で行った。〈授業実践I〉の詳細を以下に述べる。

- ・実施日：令和元年7月3日（水）
- ・福岡市内中学校1年生・2クラス
- ・内容・主眼：名詞の複数形について・複数形を用いて、相手に伝えるように英語で表現することができる。

今回実施した3種類の練習問題において、共通している問題、選択基準になった問題を以下、③～⑥に掲載する。

資料③ 共通問題 I

(1) 次の10個の名詞を条件に合わせて分類しよう ※□にはアルファベットのみ書きましょう

A: apple B: watch C: city D: dog E: cat

F: box G: book H: pen I: potato J: bus

sをつけるもの	esをつけるもの	yをiに変えてesをつけるもの

まずは、共通している問題についてだ。1つは分類する問題を取り入れたことだ。この問題を取り入れた理由は、名詞を複数形にするときの法則を正しく理解できているかを確認するためである。担当教諭は、法則についての覚え方を指導していた。しかし、インプットできてもアウトプットできなかったら使うことができない。そのために、しっかりと法則を理解し、覚えたことを整理するためにこの問題を取り入れた。

資料④ 共通問題Ⅱ

(5) 次の質問に対して、あなた自身の答えを書きましょう
① あなたの筆箱に入っているペンの数を教えてください

I () () ().

2つめに自由英作文を取り入れたことだ。この問題は、今回の学習の応用問題として、すべての練習問題に取り入れた。この問題は、例文を書くことで生徒が使い方を覚えることと、英文を書くことに少しでも慣れてほしいと考え、問題として取り上げた。

次に、選択基準になった問題をレベル別で一部問題を抜粋して資料⑤～⑦に掲載する。

資料⑤ 選択基準問題Ⅰ

(4) 次の間違いを修正して正しい答えにしよう (2つのパターンが考えられるよ!!)

①: I have a four magazine.

・
・

これは、1つ目の練習問題に取り入れた。これは、間違いを正しく修正する問題である。この問題を取り入れたのは、今回の授業内容を理解できたかを本人が確認するためである。今回の授業で説明したことが理解できれば解けてほしい問題である。

資料⑥ 選択基準問題Ⅱ

(4) 次の英単語を日本語に合うように並び替えよう 数に注意して名詞を正しい形に直そう

①: (magazine / have / I). 私は1冊の雑誌を持っています

②: (I / ten / CD / have). 私は10枚CDを持っています。

③☆: (have / three / I / child). 私は3人子どもがいます。

これは、2つ目の練習問題に取り入れた。これは、日本語に合わせて英単語を並び替える問題である。ただ、普通の並び替えとは違う少し工夫を入れた。名詞を単数か複数に合わせて書き換えるようにした。ただ並び替えをするだけでなく、今回学習したことを踏まえて問題に取り組めるような内容の問題になるように工夫を行った。

資料⑦ 選択基準問題Ⅲ

(4) 次の日本語の文を英文に書き換えよう

①: 私は2本鉛筆を持っています。

②: 私は1つのオレンジを持っています。

③: 私は月曜日に5時間授業があります。

④☆: 私は3人子どもがいます。

(4) ③のヒント

- ・ have を使って表現しよう
- ・ 5時間授業→5つの授業 と考えよう
- ・ 教科書P41にヒントの文があるよ

これは、3つ目の練習問題に取り入れた英作文である。この問題を取り入れたのは、今回の内容をしっかり理解できて、より難易度の高い問題に取り組めるようにした。また、より発展的な問題も取り入れ、生徒が少しでも考えて問題が解けるように工夫した。

2) 〈授業実践Ⅰ〉における生徒の実際

「内省的コミュニケーション」の1つとして、練習問題を生徒に選択させた。その結果、31人中13人の生徒が定期テストの点数と比較して難易度が易しいもしくは難しい問題を選択していた。易しい問題を選択している生徒は、比較的英語が苦手な生徒が多かったが、問題に取り組もうとしている姿勢をみることができた。難しい問題を選択している生徒のワークシートを見て、諦めずに問題に取り組んでいる様子が伺えた。どうしてその問題を選んだのかという質問に対して、授業内容をしっかり復習しようと思ったからと回答している生徒が多かった。しかし、中には難しい問題に挑戦してみたいと思ったからと回答している生徒もいた。

これらより、学習内容を教師が一方的に提案するのではなく、生徒自身に選択させることで、自分の現在の学習の進捗状況に合わせて選択できるとともに、それぞれの考えや性質に適した問題を選ぶことが生徒の意欲喚起につながるということが分かった。

3) 〈授業実践Ⅰ〉の成果と課題

生徒が書いた自己評価に基づき、本時の成果と課題を挙げる。

成果として最も大きいことは、生徒の学習意欲

を引き出したことである。挑戦したいと自己評価に記している生徒が 41.9%いた。このことから、実際に生徒自身に選ばせることの良さを実感することができた。生徒のやる気を引き出すために教師は、生徒の努力や挑戦を認めるコメントをしたが、このことも作用していると考ええる。

課題は2点ある。1点目は、教師の説明の仕方である。生徒にとって、教材を選択することは今回が初めてであった。生徒にとって教材を選択するための手がかりは、教師の説明だけである。そのため、より分かりやすかつ生徒の主体性を促すことのできる説明の工夫が必要であった。2点目は、生徒の課題状況を把握せずに教材を作成したことである。テストの点数のみで生徒の学力を把握したため、生徒の勉強の特徴を考慮していない教材になってしまった。教材を作るときは担当教諭から生徒の特性等を聞き出し、参考にしながら作成する必要がある。

③〈授業実践Ⅱ〉について

1)〈授業実践Ⅱ〉の概略

〈授業実践Ⅱ〉は〈授業実践Ⅰ〉とは異なり、教材を冊子にして生徒に配布した。冊子にして配付した理由は2点ある。1点目は、自分が組みたい課題をじっくり考えることができること、2点目は、他の課題と比較が可能であることである。また、〈授業実践Ⅰ〉では不明確であった評価対象問題を〈授業実践Ⅱ〉では明確にした。〈授業実践Ⅱ〉の詳細を以下に述べる。

- ・実施日：令和元年 11 月 6 日（水）
- ・福岡市内中学校 1 年生・1 クラス
- ・内容・主眼：主語が 3 人称単数の時の動詞変化・一般動詞を正しく使い、表現することができる。

また、以下に評価対象問題として取り上げた問題を掲載する。

まず①では、4 択問題を取り入れた。この問題の目的は、主語を見て、自分で適切な答えを選択できるかを図るためである。また、迷いそうな答えを取り入れたので、生徒の躓きがより明確になり、次の指導の手立てにつなげるためにこの問題を取り入れた。

次に②では、書き換え問題を取り入れた。この問題を取り入れた目的は、このクラスは、英作文が苦手な傾向にあるため、少しでも練習できるようにするためである。また、問題文を適切に理解し、主語と動詞の関係に気付いて、書き換えをすることができるかを確認するためである。さらに本時は、一般動詞の復習でありかつ定期テスト前でもあったので、少し問題の難易度を高めにし、

生徒が自分でどのくらい復習しているのかをみるためにこの問題を取り入れた。

また、今回評価対象問題を取り入れたのは、教師が生徒の理解度を見るためだけでなく、生徒自身も問題を解くことで、今自分がどのくらい理解できているのかを客観的に把握するためでもある。この授業実践を行った時期がちょうど定期テスト前であった。復習問題を解くことで、残りの勉強期間で英語において、自分が何を勉強すればいいのかを明確にすることができる。

資料⑧ 評価対象問題

① 空欄に当てはまる最も適当な語句を A～D の中から 1 つ選び答えよ。

① She and her sister () in the park.
彼女と彼女の妹は公園を走ります。
A: run B: runs C: is D: are

② He () play tennis.
彼はテニスをしません。
A: don't B: doesn't C: isn't D: aren't

③ () they eat apples?
彼らはリンゴを食べますか
A: Do B: Does C: Is D: Are

④ What time () she usually get up?
彼女はたいてい何時に起きますか
A: Do B: Does C: Is D: Are

② 次の文を () に書かれている単語を主語にして、全文書き換えよ。

① I play basketball. (he)

② I always study English. (my sister)

③ Do you watch TV? (your mother)

④ She doesn't like natto. (they)

2)〈授業実践Ⅱ〉における生徒の実態

今回行った評価対象問題を基に生徒の理解度を分析した。①が満点であった生徒は約 23%で、②が満点であった生徒は 20%とかなり低い。このことから、一度学習した内容を定着できている生徒や細かい英語の文法を正しく理解できている生徒は少ないということが分かった。

また、評価対象問題の難易度が適切であったかが問題である。もしかしたら少し難しかったのではないかと考える。そのため、生徒の学習レベルを適切に把握し、それに適した問題を作成する必要がある。

3)授業実践 C の成果と課題

本時の成果と課題について、生徒が選択した教

材と生徒の書いた自己評価を基にして挙げる。

成果としては、生徒自身が教材をすべて見た後に取り組みたい問題を自ら選択できたことである。

〈授業実践Ⅰ〉では、教師の説明後に教材を1枚選ばせたため、生徒にとっては教師の説明のみが手掛かりであり、教材の内容をじっくりと吟味することができなかった。〈授業実践Ⅱ〉では、教材を冊子にして生徒に配布したので、全ての教材の内容を見てから今の自分により適した教材に取り組むことができたのではないかと考える。

課題は、評価対象問題に関することである。今回、全ての教材に同じ評価対象問題を入れた。この評価対象問題は、本時の授業の理解度を見るために行っていることから、本時における理解度の把握はできた。しかし、定着の度合いについては確かめることができなかった。今後は、定着の度合いを確かめるような教材内容を授業の系統性を踏まえながら考案する必要がある。

5 本研究における成果と課題

(1) 本研究の成果と課題

本研究の成果と課題を教師側と生徒側の視点からそれぞれ指摘する。

まず生徒側として同一の教材を使うことと複数の教材を作成し、教材を選択することそれぞれの成果と課題について述べる。同一の教材を使用することの成果としては、生徒同士で教え合うことができる場所である。教材を選択すると個々の学習になってしまい、お互いに教え合うことが難しくなる。今回、グループ活動を取り入れたことで、グループの人が教えあっている様子が見られた。課題は、理解の早い生徒中心の活動になってしまうことである。同一の教材であることは、個々の学習状況に対応できない。他人任せにならずにグループ活動を行うことができるような教材の工夫が必要である。

次に、教材を選択することの成果としては、教材を自身で選択できることである。生徒が書いた自己評価の中に、「自分に合った問題を解くことができるから」と書かれた感想があった。このことより、生徒は適した教材を選択し、取り組むことで自身が今回の学習に対する理解度を自身で把握することができた様子がわかる。課題としては、生徒自身が自分で選択する内容である。〈授業実践Ⅱ〉において、90.0%の生徒が自分に適した教材をじっくり考えて選択することができていた。その一方で、「一番上にある教材＝一番簡単である」

と考えて選択する生徒も数名おり、これまでの学習体験についても留意する必要があると分かった。しかし、複数の学習内容を準備することで自己の学習状況に近いものを選択することができ、その過程で、自分は何がわかって何が不安なのかという点から自己と向き合うことができる。生徒の感想にも「自分で問題を選べる」とあり、改めて選択学習の有効性が確認できた。

次に教師側から見た成果と課題を述べる。生徒個々を考えて問題を作成できることである。いくつかの教材を作成していく過程で、「この問題はAさんが解けるかな」や「このレベルはBさんが選択するかな」と生徒個々のことを考えながら作成できるので、配慮が必要な生徒への手立てを考えることができた。課題としては2点ある。1点目は、説明の仕方である。教師が説明の段階で「この問題は簡単である」と言うのと、何人かの生徒は他の教材の内容を見ないでその問題を選んでしまっていた。そのため、自分の学力に沿った問題を選ばずに教材を解いてしまい、結果として、学力向上に寄与できなかったのではないかと危惧される。2点目は、授業展開である。今回は、教材を選択させるという授業実践を行った。授業展開の中で教材を行うタイミングが重要である。教材を前回の復習として行うべきか、また1時間のまとめとして行うかで教師も作成内容が異なる。そのため、教師が生徒に教材を選択させる時に、どのような意図をもって教材に取り組んでほしいのかを生徒に伝えてから、教材に取り組むことができるような工夫が必要であると考えた。

(2) 今後に向けて

今回の授業実践の課題を解決するために、次のような取り組みを今後現場に出た時に行う必要がある。

まずは、教材を選択するという授業を継続的に行うことである。今回、選択学習をそれぞれ単発的に行ったので、授業を行っている中で生徒が混乱している様子が見られた。その状況を改善するために、授業の中で繰り返し取り組んでいく必要がある。

次に、生徒が自分の学習状況を適切に把握できずにいたことに対する対応が必要である。この課題は、教師のガイドが十分ではなかったこと、何を学習すべきなのか、何が不安なのかを見極めるためのいわば「マップ」のようなものの準備がなかったということによって生じたものである。選択学習とは、生徒が自分の得意や苦手を把握することなく、自分がやりたい問題を選択することに

なっている。生徒が自分の学習状況を適切に把握できるためには自分のクセや考え方を客観的に把握し、それに基づいて生徒自身がより自分の学習を系統的な視点から見ることで教材を選択できるサポートをしていく必要がある。そこで今回、「マップ」の作成を試み、資料⑨に示した

この「マップ」のポイントは3点ある。1点目は、チェック項目が細かいことである。英語の文法項目はかなり細かい。日常的に行う英作文の作成や定期テストでもケアレスミスをする生徒は多い。項目を細かく分けることで、教師側も指導をするポイントとして指導でき、生徒も英作文を書くときにどのようなことに気を付けばいいのかわかりやすくなる。2点目は、チェック欄を設けたことである。これは、復習として英作文を作成した時に用いる表の内容である。確認テストは、正解することが目的ではない。自分がどの文法項目を理解し、定着しているのかを確認することが目的である。また、完全に正解しなくても部分的に正解していることはある。このことは、生徒の英語嫌いを無くすために効果的なのではないかと考える。3点目は、簡単な文例や説明を書く欄があることである。一度の説明で習った文法事項を覚えることは難しい。文例や説明を自分なりにまとめて書いておくことで、自分で理解しやすくなる。また、忘れた内容をすぐに確認することができるので、生徒もすぐに復習することができる。

資料⑨ 「学習状況確認マップ」案
(井手口 2020)

チェック項目	チェック欄					文例・説明
	(正解したら色を塗ろう)					
①主語の場所						
②述語の場所						
③be 動詞の使い分け						
④be 動詞の疑問文						
⑤be 動詞の否定文						
⑥一般動詞の使い分け						
⑦一般動詞の疑問文						
⑧一般動詞の否定文						
⑨what を使った疑問文						

6 おわりに

本研究において、自己選択を行う方法を少し見つけることはできた。しかし、通年で授業実践を行ったことではない。そのため、まだ試行が必要である。また、学習課題を選択できるようにし、生徒が主体的に学習に取り組めるように工夫したが、本当に生徒が主体的に取り組めているのかは不明である。生徒が自分の学習進捗に応じて選択できるように、選択させる教材や内容をより選定・吟味していく必要がある。さらに、選択学習を行い、自分に合った教材を選択することが学力向上とどのように関係しているかまでは今回解明することができなかった。今後は、学校現場で、生徒が主体的にかつ個々の進捗に応じた学習に取り組むことができるように、今回行った研究をベースに通年行うことで、より発展させることができるように研究を継続したい。

(注1) 2020年1月31日現在で、「英語科」・「選択学習」のキーワードで論文検索をした結果、2件見つけることができた。

主な・参考文献

- C.ファデル M.ピアリック B.トリリング (2018) .『21世紀の学習者と教育の4つの次元』岸学監訳 北大路書店 59-60,133-134
 川上武志 1995 中学校英語科における選択学習ー選択肢の設定と生徒の英語力ー 旭川英語英文学研究 3 pp.77-89
 M・エンダーソン 2019 教育のプロがすすめる選択する学びー教師の指導も、生徒の意欲も向上！ー 吉田新一郎(訳) 新評論
 松下佳代 2010 〈新しい能力〉は教育を変えるか学力・リテラシー・コンピテンシー ミネルヴァ書房
 鈴木政浩 (2018) 「英語授業におけるコミュニケーションー英語授業学研究の視点からー」新英語教育 第590号

謝辞

本研究をまとめるにあたり、機会を提供し、協力していただいた全ての先生方に、心より感謝申し上げます。